

IPBES 総会に向けた非公式国際科学ワークショップ 議事録  
An Informal Pre-plenary Scientific Workshop on Assessment and IPBES  
2011年7月25日(月)～7月27日(水)

主催：日本国政府環境省、国連大学、南アフリカ共和国政府  
協力：国連環境計画 (UNEP)  
開催場所：国連大学 エリサベス・ローズ・ホール

7月25日(月)

9:00 ～ 10:00 開会挨拶・全体説明

挨拶

渡辺綱男 環境省自然環境局 局長

Prof. Albert van Jaarsveld (President and CEO of National Research Foundation, South Africa)

武内和彦教授 (国連大学副学長)

UNEP からのプレゼンテーション

IPBES (Intergovernmental Science and Policy Platform on Biodiversity and Ecological Services: 生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム) に関するこれまでの経緯と今後の予定

- ・ 科学と政策のインターフェースを強化するために IPBES 政府間マルチステークホルダー一合会が3回行われた。
  - 第1回 プトラジャヤ (マレーシア) 2008年11月
  - 第2回 ナイロビ (ケニア) 2009年10月
  - 第3回 釜山 (韓国) 2010年6月
- ・ 釜山成果(Busan Outcome)で合意した4つの IPBES の機能
  - ① 知識の生成 (Knowledge generation)
  - ② 定期的なタイムリーなアセスメント
  - ③ 政策策定と実施の支援
  - ④ 能力構築 (Capacity building)
- ・ 釜山成果での合意事項
  - ・ 独立した政府間機関
  - ・ 科学的独立性、信頼性、重要性、正当性
  - ・ 政策処方箋的ではなく、政策にとって重要な  
(policy-relevant, not policy-prescriptive)
- ・ UNEP 主催による IPBES 第1回総会のスケジュールと討議内容  
2011年10月3日～7日 ナイロビ (ケニア)  
役員の選出、議題の採択、組織など

## アセスメント・ワークショップ開催経緯とコンテキスト

- ・釜山成果で合意した IPBES の 4 つの機能の中でもアセスメントが重要であることに鑑み、このワークショップでは IPBES におけるアセスメントについて議論する。
- ・釜山成果文書は法的拘束力のある文書ではない。
- ・科学者が IPBES 設立の最初から関与する。  
科学とは自然科学だけではなく、社会科学と人文科学を含む。
- ・IPBES は IPCC を単にコピーするものであってはならない。
- ・政府代表にとって有益なものでなければならない。
- ・能力構築が重要。次世代の科学者の育成を行わなければならない。

## **10:40~12:50, 14:00~14:30 全体会合**

アセスメント・ワークショップ作業文書第 0 次草案 (the zero order draft of AWWD: Assessment Workshop Working Document) についてのプレゼンテーションと議論

## グループ 1 アセスメントの性質と共通の概念的枠組み

<発表>

- ・ワークショップはどのようなアセスメントをすべきかを議論する場ではない。  
それは、IPBES 総会で議論し、決定すべき事項。  
ワークショップでは、アセスメントのプロセスについて議論する。
- ・政策処方箋的にならないように、各グループは、複数のオプションを示して、それぞれにメリットとデメリットを記載するようにはどうか？

## グループ 2 アセスメントのタイプとスケール

<発表>

- ・マルチスケール（グローバル、リージョナル、サブリージョナル）でアセスメントを行うことが大切である。
- ・どのような順番でアセスメントを行うべきか？  
逐次的(sequential)に行うべきか、同時並行的 (parallel) に行うべきか？
- ・異なるスケールのアセスメントの間でハーモナイゼーションを行うことが必要である。

## グループ 3 データと指標

<発表>

- ・データについて  
GEO-BON, TRY データベースなど既存のデータを活用する。
- ・指標について
  - ・指標には A 指標、B 指標、C 指標がある。
  - ・生態系サービスに係る指標はほとんどが B 指標、C 指標。  
1つの指標が他の指標に悪影響を与えると1つの指標だけを取り上げるわけにはいかない。指標間のトレードオフも考慮した方がいいのではないか。
  - ・社会経済システム・生態系サービス・人間の福祉・政策の間の相互関係性

#### グループ 4 知識体系の活用と地域固有の知識(indigenous knowledge)の活用

##### <発表>

- ・社会生態系システムについて
- ・アマゾンにおける事例の紹介

##### <議論>

- ・ユニットをどうするか？生態学的ユニットにするのか？
- ・薬草などの価値評価をすることがローカル・コミュニティにかえってマイナスの影響を与えることもある点を考慮した方がいい。
- ・indigenous という言葉は欧州中心主義的な印象を与えるので、別な用語を考えた方がいいのではないか？

#### グループ 5 シナリオ、アセスメントの不確実性の取り扱い

##### <発表>

- ・シナリオのモデルの図式の紹介
- ・シナリオ策定における 6 つの課題
  - ① 指標をどうするか？
  - ② モデル間の比較をどうするか？
  - ③ データでモデルを実証するのはどのように行うか？
  - ④ 不確実性をどのように取り扱うか？
  - ⑤ どのスケールで行うか？
  - ⑥ 政策的に重要な (policy-relevant) シナリオをどのように策定するか？

##### <議論>

- ・政策決定者もシナリオ策定に関わってもらえるのはどうか？
- ・人口の増加を取り込んだモデルが必要。

#### グループ 6 原則

- ・IAC による IPCC のレビュー・プロセスについての紹介
- ・IPBES は、各国政府に対して成果物を提出するという契約である。  
科学研究の場合は、何か新しいことを学んで変更するという適応的マネジメントを行うが、IPBES の場合は、いったん契約すると変更できないという違いに留意して議論して欲しい。
- ・成功の尺度となるのは
  - ① 信頼性のある情報の提供
  - ② 実際に成果があること

14:30 ~17:00 グループ別検討 (各グループに分かれて議論)

## 17:00 ～ 18:00 ユーザーとの意見交換

### <WBSCD>

- ・ビジネス界の視点についての発表

### <環境省>

- ・IPBES の活動と組織の基本的な考え方（日本政府の予備的見解）
  - ・データ収集、分析、アセスメントを促進。
  - ・科学的・政治的に独立・中立
  - ・信頼性がある、専門家によるピアレビューを受けている。
  - ・重複を避けるために、既存のプログラムやネットワークをもとにする。
  - ・ボトムアップアプローチ
  - ・ボランティアな活動と協力
- ・IPBES の組織（日本政府の予備的見解）
- ・IPBES の活動（日本政府の予備的見解）

### <議論>

- ・私たち科学者も環境省の案とほぼ同じようなことを考えていた。
- ・ボランティアとはどういうことか？
  - 強制的（mandatory）ではないということ。

18:00

各グループよりアセスメント・ワークショップ作業文書第1次草案（the first order draft of AWWD）の中間報告提出

7月26日(火)

9:00~12:45 全体会合

昨日のグループ別討議の中間報告と議論

### グループ 6 原則

<発表>

・5つの原則について

- ① 科学的独立性 (scientifically independent)  
科学委員会とレビュー委員会を設置。
- ② 科学的信頼性 (scientifically credible)
- ③ 学際的 (trans-disciplinary)で、地域・ジェンダーのバランスがとれている。
- ④ saliency  
(saliency とは、社会のニーズに基づいており、政策的に重要であるという点において卓越性があるという意味)  
マルチステークホルダーを念頭に置く。
- ⑤ 正当性 (legitimate)  
NGO や 民間の参加をどうするか？

<議論>

・マルチステークホルダーの参加プロセスをどうすればいいか？

### グループ 1 アセスメントの性質と共通の概念的枠組み

<発表>

- ・アセスメントの範囲についての3つの選択肢
  - ① 包括的報告
  - ② テーマ別報告 (例えば森林、水域など)
  - ③ 特別報告 (例えばティッピング・ポイントなど)
- ・焦点をどうすべきか？
  - ① 生物多様性と生態系サービス+人間の福祉を考慮する。
  - ② 生物多様性と生態系サービスのみ焦点をあてる。
- ・概念的枠組み (conceptual framework) についての特徴をどうすべきか？
  - ① 固定的枠組→包括的分析の蓄積と比較に適している。
  - ② 動的に適応する柔軟な枠組→枠組みを継続的に改善していくことができる。

<議論>

・人間の福祉 (HWB: human well-being) は大切な概念である。  
チームを組織して、概念を明確にしてはどうか？

### グループ 2 アセスメントのタイプとスケール

<発表>

・アセスメントは、グローバル、リージョナル、サブリージョナルの「マルチスケール」で実施することが重要である。

逐次的に行う方法(sequential)と同時並行的に行う方法(parallel)のどちらがいいか？

- ・異なるスケールのアセスメント間のハーモニゼーションをどのように行うか？  
概念的枠組みの共有、サンプリングプロトコルの標準化、データの共有化などを通して、異なるスケールのアセスメント間のハーモニゼーションを行う。

<議論>

- ・リージョナル・アセスメントは10程度必要。
- ・サブリージョナルについては定義する必要がある。  
例えば、流域もサブリージョナルか？
- ・範囲(scope)を定めることが大切。

### グループ 2B テーマ別アセスメント、新しい問題のアセスメント

<発表>

- ・複数のスケールにまたがる事項についてテーマ別アセスメントを行う。
- ・新しいトピックは、政策に大きな影響を与える可能性があるため、アセスメントを行う。

### グループ 5 シナリオ、アセスメントの不確実性の取り扱い

<発表>

- ・生態系の変化による悪影響について事前に警告を発し、生物多様性と生態系サービス損失による将来コストと保全の便益を評価し、適応的管理戦略を策定する一助とする上においてシナリオは重要である。
- ・シナリオは、社会経済的発展・生物多様性と生態系機能の直接要因とその影響などの要素に基づき策定する。
- ・ここでは、モデル間のつながりを図で示した。
- ・政策にとって重要だが、政策処方箋的にならないようにするために、いくつかの選択肢を示すようにした。
- ・シナリオの策定に関する選択肢
  - ① 社会経済的シナリオ→生物多様性シナリオ
  - ② 生物多様性ターゲット→社会経済的シナリオ
  - ③ 政策→生物多様性への影響
- ・グローバル・シナリオとリージョナル・シナリオの策定に関するオプション
  - ① ダウンスケール (グローバル・シナリオ→リージョナル・シナリオの策定)
  - ② アップスケール (リージョナル・シナリオ→グローバル・シナリオの策定)
  - ③ 同時並行 (2つのシナリオを同時平行で策定する)
- ・不確実性を明確に透明性をもって扱うことはアセスメントの成功にとって重要である。

<議論>

- ・既存のネットワークを活用することができないか？

## グループ 4 知識体系の活用と地域固有の知識(indigenous knowledge)の活用

### <発表>

- ・ 知識体系は広範囲なので、定義する必要がある。
- ・ 地域固有の知識や口伝歴史なども尊重すること。
- ・ 知識を収集・分析・比較するための共通言語・プロトコール・枠組みを策定する。
- ・ 知識体系について検討すべき 4 つの点
  - ①概念的枠組み
  - ②異なるスケールでのアセスメント
  - ③データと指標
  - ④シナリオと不確実性

## グループ 3 データと指標

### <発表>

- ・ データ収集に関しての選択肢
  - オプション 1 IPBES が中心となってデータを収集する。
  - オプション 2 IPBES が GEO-BON に委託してデータを収集する。
- ・ データに関しての選択肢
  - オプション 1 既存のデータを集める。
  - オプション 2 社会経済的データと連携させる。
- ・ 生態系サービス間の相互作用については、まだよくわかっていない点があるので、相互作用のモデルを作ることが課題である。
- ・ 政策決定者が活用しやすいように、単なる指標のリストではなく、指標をフレームワークにつなげるようにして提示したい。  
こうすることによって、ギャップがよくわかるようになるだろう。

### <議論>

- ・ 社会的指標が不足しているのが課題。
- ・ 経済的価値とともに非経済的価値に焦点をあてる必要がある。

## **14:00～16:00**      **グループ別検討**

## **16:00～18:00**      **全体会合**

### グループ 1 アセスメントの性質と共通の概念的枠組み

### <発表>

- ・ 概念的枠組みについては、処方箋を出すのではなく「要素」(element)を記載した。
- ・ 通常ガバナンスは対応戦略として考えられるが、ここでは初めから分析モデルに統合するようにする。
- ・ 従来、コミュニケーションは、アセスメントが出来上がった後に考えていたが、IPBES ではコミュニケーションについては最初から考慮するようにしたい。そうすれば、人々

の行動を変革するのに役に立つだろう。

- ・従来のアセスメントでは、人間の福祉については、取り上げてこなかった。
- ・データは生態系サービスに焦点をあててきたが、すべての要素に焦点をあてるべきである。

<議論>

- ・アセスメントのクライアントはだれか？政策決定者だけか、一般市民も含むのか？  
→一般市民は IPBES のカギとなるパートナーである。
- ・一般市民の行動を変革するとすると、ソーシャルネットワークなど賢いコミュニケーションの手段を考えなければならない。  
→それは、政策処方箋的になってしまう。政策は政府が選択すべきもの。  
→人々の対応 (response) についてのアセスメントをしてはどうか？  
例えば、税が人々の行動をどのように変えるか、リアルタイムで情報を提供することによって、エネルギーの消費がどのように変わるかなど、人間の行動を理解する、問題の人間の側面について理解を深めるようにしてはどうか？

## グループ 2 アセスメントのタイプとスケール

<発表>

- ・なぜ IPBES はマルチスケールでなければならないか、という基本線に沿って更にいくつかのオプションを追加した。

<議論>

- ・ナショナル・アセスメントは行うべきか？  
→IPBES は、ナショナル・アセスメントは行わないが、ナショナル・アセスメントのプロトコールを提供する役割を果たす。  
→アセスメントのスケールとガバナンスのスケールをあわせた方がいいのでは？  
そうしなければ、単なる研究に終わってしまう。  
ナショナル・アセスメントだと、ガバナンスのスケールと一致しているので、具体的な政策につながる。
- ・リージョナル・アセスメントのメリットは、各国が集まってリソースを共有すること。
- ・リージョナル・アセスメントとサブリージョナル・アセスメントの選択基準を策定すること。
- ・リージョナル・アセスメントとサブリージョナル・アセスメントの間のフィードバックループが必要。

## グループ 2B テーマ別アセスメント、新しい問題のアセスメント

<発表>

- ・予備的アセスメントを科学者が行う。

<議論>

- ・何をアセスメントするかは政府間会合のプロセスで行う。

### グループ 3 データと指標

#### <発表>

- ・知識体系のグループやスケールのグループと重複している部分があるので、他のグループとの話し合いが必要。
- ・ dual evidence-based peer review を行う。  
(dual evidence-based peer review とは、科学的な知識体系と異なる知識体系については、科学的な判断基準をそのまま適用するのではなく、その地域固有のコンテキストに配慮した透明性のある方法で検証を行うこと)  
科学的知識と地域固有の知識については、それぞれ別個の検証方法を用いるようにする。
- ・知識体系と政策決定者との間のインターフェースが必要。

#### <議論>

- ・データについては選択肢を提示したが、指標についても選択肢を提示する必要があるか？  
→CBD 用の指標をもとに構築することができる。現在あるものを活用して、それをフレームワークにあてはめる。

### グループ 4 知識体系の活用と地域固有の知識(local and indigenous knowledge)の活用

#### <発表>

- ・なぜ地域固有の知識が必要なのか、その重要性について。
- ・釜山成果で用いられている用語である”local and indigenous knowledge”を用いることにした。
- ・地域固有の知識は、途上国だけではなく、先進国にもあるものである。
- ・地域固有の知識体系については、科学の知識体系とは異なる検証方法を用いる。  
1つの知識体系で用いられている方法で、他の知識体系を判断することはしない。

### グループ 5 シナリオ、アセスメントの不確実性の取り扱い

#### <発表>

- ・ティッピング・ポイントのモデリングについて

#### <議論>

- ・間違った選択が行われないようにするためにどのように表現したらいいか？  
これは科学的見地からの判断の範疇になるので、政策決定者の判断だけに任せていいのだろうか？  
選択肢の中でもより有益なものについては、どのように扱ったらよいか？
- ・ティッピング・ポイントについては、グローバル・チームが担当するのか、リージョナル・チームが担当するのか？  
IPCC との重複を避けるために、共同で作業部会を設置することを提案したい。

## グループ 6 原則

<発表>

- ・ ほぼ出来上がっているので、ほとんど追加はしていない。
- ・ 学際的(trans-boundary)という言葉については、定義する必要がある。
- ・ ガバナンスに関しての組織の選択肢を追加した。

22:00 各グループよりアセスメント・ワークショップ作業文書第1次草案 (the first order draft of AWWD) 提出

7月27日(水)

## 9:00~12:50, 14:00~15:00 全体会合

各グループよりアセスメント・ワークショップ作業文書第1次草案 (the first order draft of AWWD) の報告と議論

### 全般的共通事項

- ・単にオプションを提示するだけでなく、科学コミュニティからのメッセージを伝えるために、「提言」(recommendation)とした方がいい事項については、提言とするように各グループで検討して欲しい。
- ・草案全体で作業部会の数が10程度あるが、それでは多すぎるのではないかと統合できる作業部会があるかどうかについて検討した方がいい。
- ・「学際的」(trans-disciplinary)とは、科学者だけではなく、ステークホルダーも参加することである。幅広いステークホルダーに参加してもらうための手続きについてどうするかを考えてもらいたい。
- ・BES(生物多様性と生態系サービス)が人間の安全保障にとっても重要であること、なぜ複雑なのか、なぜ今まで十分な評価がなされてこなかったのかなどを前文(preamble)として示した方がいい。前文を追加することにする。
- ・(UNEPより)UNEPの作業文書(Working document)と一貫した用語にした方がいい。この草案文書では「科学委員会」(scientific committee)となっているが、「科学パネル」(science panel)に統一した方がいい。  
→UNEPの文書を配布。全員が文書に目を通して、用語の整合性を確認。

### グループ6 原則

<発表>

- ・原則の順番を変更する。
- ・信頼性の原則は重要である。IPCCから教訓を得て、科学パネル(science panel)に加えて、独立したレビューパネル(independent review panel)が必要。  
利益の相反がないようにチェックする独立した機能が必要である。
- ・作業部会(working group)の数をどうするか?  
→UNEPの文書にすでに作業部会についての記述があるので、UNEP文書と整合性をもたせた方がいい。  
IPCCの様に大きな作業部会ではなく、アドホック作業部会(ad hoc working group)の設立も検討する。

### グループ1 アセスメントの性質と共通の概念的枠組み

<発表>

- ・アセスメントサイクルは10年間でいいか?

- ・「概念的枠組みの要素」(elements of conceptual framework)については、選択肢ではなく提言とする。
- ・固定的枠組みとするか、適応的枠組みとするかは選択肢のままとする。
- ・「枠組みのアセスメントへの適用」に関しては、提言とする。
- ・「概念的枠組みの設計プロセス」に関しては、提言とする。

#### <議論>

- ・「概念的枠組みの設計プロセス」は、知識拡大のカギとなるものである。幅広いステークホルダーに参加してもらえる仕組みを考えた方がいい。
- ・10年サイクルでは長いのではないか？
  - 2015年MDG(ミレニアム開発目標)ターゲット、2020年生物多様性ターゲットと結びつけることも検討した方がいいのでは？
  - そうすると、政策決定者は歓迎するかもしれないが、政策処方箋的になるかもしれない。
- ・グローバル・アセスメントとリージョナル・アセスメントのどちらを先に行うにしても、両者間のフィードバック・ループが必要である。
- ・スケールがとても重要で、基盤となるものである。スケール間のハーモニゼーションも大切である。
- ・ここでのキー・メッセージは何か？
  - コンテキスト、ベネフィット、影響などの要素が大切である。
  - ターゲット・グループをどうするか？
  - 政府のみを対象にするのか、すべての人を対象にするのか？
  - それによって、報告書の内容が異なる。
- ・知識の拡大と幅広いステークホルダーの参加が重要であると同時に、信頼性を確保することが重要。それをどう両立させるかが課題である。IPCCでは、レビュープロセスが批判され、不適切な文献の引用によって、信頼性が損なわれた。IPBESにおいては信頼性の確保が重要。

## グループ 2 アセスメントのタイプとスケール

#### <発表>

- ・グローバル・アセスメントとリージョナル・アセスメントのどちらを先に行うかは選択肢のままとする。
- ・リージョナル・アセスメントを何件行うか？10~15件は適切か？
  - 予算がなければこれだけの数を行うことはできない旨を注意事項として記載してはどうか？

#### <議論>

- ・(草案全体について) IPBES 第1回総会に関連する事項と第2回総会に関連する事項に分けた方がいいのではないかと混在していると手続き上混乱するのではないかと？
  - (UNEPより) 第1回総会で討議する事項は、設立の法的基盤、機能、運営原則などについて。
  - 全体を再編するのではなく、最初のセクションで第1回総会に関連する事項

をサマリーとしてまとめた方がいいのでは？

- ・作業部会については、UNEPの文書に沿って設立することになるだろう。  
UNEP文書27(b)のアセスメント作業部会の下にグローバル・アセスメントとリージョナル・アセスメントを検討する小作業部会(sub working group)を設けてはどうか？

## グループ 2B テーマ別アセスメント、新しい問題のアセスメント

<発表>

- ・テーマ別アセスメントの選択については、提言にしてもいいのでは？
- ・テーマ別アセスメントについては、作業部会(working group)が行うか、それとも小作業部会(sub working group)が行うか？

<議論>

- ・(UNEPより) 作業部会については恒久的作業部会(permanent working group)にするのか、それともアド・ホック作業部会(ad hoc working group)にするのかも検討した方がいい。
- ・新しい問題のアセスメントの選択は、政策側が行うのか、それとも科学者側が行うのか？
  - 新しい問題については、科学者からのボトムアップも重要である。
  - (UNEPより)釜山成果文書では「科学者が新しいトピックを明確にする」と記載されている。
- ・対応と行動が重要なのではないか？
  - 対応は重要であり、政策決定者は歓迎するかもしれないが、政策処方箋的になるので、ここでは入れていない。

## グループ 5 シナリオ、アセスメントの不確実性の取り扱い

<発表>

- ・シナリオの4つの課題について
  - 1) シナリオ策定アプローチの3つの選択肢について
    - ・CBD(生物多様性条約)はオプション2に関心を持っている
    - ・アセスメント作業部会の下にシナリオ策定の小作業部会を設けて、そこでアプローチについて検討してはどうか？
  - 2) 地理的スケールの異なるシナリオをどのように扱うか？
  - 3) モデル間の比較をどのように行うか？データでの検証をどのように行うか？
  - 4) ティッピング・ポイントをどのように説明するか？
    - ティッピング・ポイントは、グローバルとリージョナルを検討する必要。
    - 生物物理学的ティッピング・ポイントだけではなく、社会的ティッピング・ポイントの検討も必要なのでは？

<議論>

- ・グローバルとリージョナルでは不確実性が異なるので、特別作業部会を設立してはどうか？

- ・初年度はガイドラインを策定する必要性があるので、アド・ホック作業部会の数が必然的に多くなってしまいうだろう。
- ・作業部会について文書に記載する時には、アド・ホックか、恒久的か、メンバーは科学者のみか、それとも科学者以外のステークホルダーも入れるのかも明確にすること。

#### **グループ 4 知識体系の活用と地域固有の知識(local and indigenous knowledge)の活用**

##### ＜発表＞

- ・人間と生態系は共に進化してきたので、地域の人々の経験を活かすことが重要である。
- ・saliency の原則に鑑み、1つの政策を「万能薬」のようにすべての地域あてはめるといふ考えではなく、政策においては、それぞれの地域によって異なる性質(heterogeneity)を考慮しなければならない。

##### ＜議論＞

- ・LINKS とは何か？  
→地域固有の知識 (local and indigenous knowledge) のこと。  
→LINKS という用語はわかりづらいので、“local and indigenous knowledge”と記載した方がいい。
- ・異なる知識体系の信頼性をどのように確保するのか？  
→ dual evidence-based peer review のガイドラインを策定する。

#### **グループ 3 データと指標**

##### ＜発表＞

- ・指標については、概念的枠組みのグループと連携して策定する
- ・データ収集に関しては、オプション 2 (GEO-BON がハブとなるという案) の方が、対費用効果が高く、重複を避けることができるため、こちらを提言とする。
- ・不足しているデータとしては、社会科学的データとティッピング・ポイントに関するデータである。

##### ＜議論＞

- ・GEO-BON の役割は？  
→GEO-BON はデータへのアクセスを仲介する役割。

### **15:00～17:30 グループ別検討**

17:45 各グループよりアセスメント・ワークショップ作業文書第2次草案 (the second order draft of AWWD) 提出

## 18:00 ~18:30 閉会の挨拶

Prof. Anantha Kumar K. Duraipppa

次のステップ

- ・今回のワークショップの成果をもとに、第1回 IPBES 総会用のインフォメーション・ドキュメント(Information Document)を作成する。
- ・ナイロビでの第1回 IPBES 総会でサイドイベントを開催する予定。  
科学コミュニティの重要性と役割について伝える。
- ・10月の IPBES 総会の後にフォローワークショップを開催する。  
第2回ワークショップは、2011年12月~2012年1月頃に開催の予定。  
次回には若手の科学者にも是非とも参加してもらいたい。

駐日南アフリカ共和国特命全権大使 ガート・ヨハネス・グローブラー閣下

日本国政府と国連大学に感謝。

ワークショップを日本国政府とともに共催したことは光栄である。

これは、南アフリカ共和国と日本の友好と親善の表れである。

南アフリカは生物多様性に富んだ国として IPBES のプロセスに積極的に参加する。

武内和彦教授 (国連大学副学長)

生物多様性は気候変動と密接に関連している。

南アフリカ共和国で開催される気候変動枠組み条約締約国会議の成功を祈念している。

奥田直久 (日本国政府環境省 自然環境局 生物多様性地球戦略企画室 室長)

釜山後初めてのアセスメントに関するワークショップで素晴らしい成果が得られた。

10月の IPBES 総会で提言を行う。

今後のアセスメントの議論にはずみがつくのではなかと期待している。

武内和彦教授 (国連大学副学長)

日本国政府、南アフリカ共和国政府に感謝。

大変実り多いワークショップだった。

アセスメント・サイクルは10年と息の長い取り組みになるので、2回目のサイクルに向けて継続的に取り組むためにも、今後、若手の科学者の参加を期待する。